

## 無生物主語構文について

斎 藤 伸 治

### 1. はじめに

英語と日本語を比較した場合、前者はある行為者が出来事を引き起こすという捉え方を好む言語であるのに対し、後者は出来事そのものに注意を払う傾向が強い言語であるという趣旨のことが、従来から指摘されている。<sup>1)</sup> そして池上 (1981) などにより、前者のような型の言語を<する>的な言語、後者のような型の言語を<なる>的な言語と呼ぶ習わしもほぼ定着しているように思われる。そのような日英両言語間の発想法、表現法上の相違を最もよく反映していると思われる構文の一つは、無生物主語構文であろう。英語では、(1) のように、本来ならば行為する主体としての人間のみが現れるような述語動詞の主語の位置にも、無生物が現れる。英語では、無生物をも、あたかも意図をもった行為者であるかのように表現する形式を好む。一方、そのような表現形式は日本語では不自然であり、自然な日本語にするには、かつこ内に示したように、人間を主語として、述語動詞もそれに応じた表現に換えなければならない((1a, b) の例は西村 (1998)) からの引用)。

- (1) a. This medicine will make you feel better. (この薬を飲めばよくなります)
- b. This book gives you some idea of life in Ancient Greece. (OALD)  
(この本を読めば古代ギリシャの生活というものが分かりますよ)
- c. Hard work killed his father. (過労で彼の父親は死んだ)
- d. What brought you out here? (なぜあなたはここに來たのですか)

英語の無生物主語は、自然な日本語では(「この薬を飲めば」、「この本を読めば」、「過労で」、「なぜ」のような)副詞的表現をとる。また、日本語では英語の述語動詞の意味内容のうち、結果に相当する部分のみが、述語動詞として表現されることに注意する必要がある。例えば、(1b) の give ..... some idea は「.....が分かる」という結果をその意味内容に含んでいるため、日本語ではその部分だけが表現される。更に、tell, show, bring the information, reveal などの動詞も同様の結果を含んでいるため、それらが無生物主語構文の述語動詞として現れている場合には、日本語にするとすべて「.....が分かる」となる(国広 (1967: 157-59) を参照)。このように英語の方の動詞が多様であっても、それらの動詞が同じ結果内容を含んでいる場合には、日本語に訳した場合、同じ動詞が用いられるということになるのである。

勿論、述語動詞が自動詞の場合には、英語と同様に日本語でも無生物主語が可能である。

---

1) 例えば国広 (1974), Hinds (1986), 影山 (1996) などを参照。



例えば、この名詞句の階層性は、次のように日本語における能動文と受動文の使い分けに反映される。

- (4) a. 女は熊を殺した。  
b. ?熊は女に殺された。
- (5) a. ?熊は女を殺した。  
b. 女は熊に殺された。

角田の説明によれば、階層の上で動作主の方が動作の対象よりも高い場合には能動文が好まれ、逆に動作の対象の方が高い場合には受動文が好まれる傾向がみられるという。「女」(人間名詞)と「熊」(動物名詞)では「女」の方が階層性が高いので、(4)では能動文の方が自然であるが、(5)では逆に受動文の方が自然となる。要するに、話者にとってより関心のあるもの、より話題になりやすいものである階層の上でより高い位置にある名詞句の方が、主語として選ばれるということである。同じ理由で、次の(6)において「大波」(無生物主語)は「私」(1人称)より階層の上で低いので、「大波」を主語とした無生物主語構文(6a)は不自然であり、同じ状況を表現するためには(6b)のように受動文を用いなければならないということが説明されることになる。

- (6) a. ?大波は私をさらった。  
b. 私は大波にさらわれた。

このように、名詞句の階層性は日本語の無生物主語構文の不自然さを説明する場合にも有効であると、角田は述べている。そうすると、主語の位置に無生物がきている場合でも、それより階層の上で低い名詞句がその動作の対象となっている場合には自然な文であることが予想されるわけであるが、実際、その予想は、次の角田(1991)からの例にみるように正しい。

- (7) a. 台風が九州を襲った。  
b. 大水が家屋を押し流した。

角田によれば、日本語では一般に無生物主語が不自然であるとか、翻訳調であるとか言われているが、それはすべて(6a)のように動作の対象が人間であるような例に基づいての議論であり、(7)のように主語が無生物であっても、その動作の向かう対象が同様に無生物である場合には何ら不自然ではない、ということになる。(7a)の例にとると、主語の位置にある「台風」は自然の力を表す名詞であり、(3)の図に従えば、無生物名詞の中でも最も高い位置を占める。他方、動作の対象となっている「九州」は地名を表す名詞であり、同じ無生物ではあっても主語である「台風」より階層の上で低い。これが(7a)の無生物主語構文が何ら不自然ではないことの理由ということになる。このようにして名詞句の階層という観点から、日本語において無生物主語構文が多くの場合不自然に響くのはなぜなのか、更に、どのような条件のもとで無生物主語構文が可能となるのかについて一応の説明は与えられていると思う。この名詞句の階層性という考え方自体は、非常に適用範囲の広い普遍的な原理であり、日本語だけでなく、世界の諸言語の様々な文法現象に適用できる言語類型論上強力な武器となっているようである(詳しくはSilverstein(1976)、角田(1991)などを参照)。また、先の無生物主語構文に対する

説明も、認知的な観点からみてかなり自然で納得のいく説明のように思われる。そうすると、なぜ英語において無生物主語構文が比較的自由にみられるのかが、むしろ不思議に思えてくる。例えば、受動文に関しては、英語の場合にも、名詞句の階層性の原理が有効に働いているからである（久野（1978）からの例）。

- (8) a. ? Then, John was hit by me.  
b. ? その時、太郎が僕になぐられた。

1 人称代名詞の方が固有名詞よりも階層上高いので、後者が主語となっている (8) の文は、日本語の場合と同様に英語でも不自然な文となる。そうすると、英語の無生物主語構文(の多く)だけが、名詞句の階層の原理に違反した形で成立しているものであり、これに対して何か原理だった説明が必要とされることになるのである。あえてこの一般性の強い原理を違反してまでもこのような構文を可能にするようなメカニズムが英語に備わっているということになる。無生物主語構文の成立に関して働いている、日本語にはみられないこの英語特有のメカニズムとは一体何か。そのようなメカニズムの提案の一つと考えられる認知文法の枠組みからのアプローチとして、次に西村（1998）をみていくことにしよう。

### 3. 西村（1998）：認知文法からのアプローチ

西村（1998）は、英語の無生物主語構文の多くが使役動詞を述語とする文であることに着目して、無生物主語構文を、使役構文のプロトタイプの一つの方向への拡張事例として位置づけている。ここで前提とされている基本的な考え方は、(構文などの)文法カテゴリーは、ある典型的と考えられるメンバー（プロトタイプ）を出発点として、それが何らかの意味的な動機づけに基づいて拡張されていくことによって、他の非典型的なメンバーを取り込んでいくことでカテゴリー全体が形成される、というものである。そして、拡張の方向やその程度は言語ごとに異なるため、二つの言語間で同一現象の範囲にずれが生じることになる。具体的に、使役構文についてみていこう。次の (9)、(10) ような文が日英両言語の＜使役構文＞のプロトタイプと考えられる。特に主語に注目するならば、使役構文に典型的な主語とは、「自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において、用いることによって、対象の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する人間」（西村（1998：125））ということになる。

- (9) a. John opened the door.  
b. 太郎はドアを開けた。  
(10) a. John killed Mary.  
b. 太郎は花子を殺した。

英語において (11) のような無生物主語構文が可能なのは、このプロトタイプの＜使役行為者＞のカテゴリーを無生物にまで拡張されるため、というわけである。

- (11) a. A gust of wind opened the door. （西村（1998））

- b. Hard work killed his father. (= (1c))

日本語ではなぜ無生物主語構文が不自然かという点、日本語では、この〈使役行為者〉のカテゴリーが無生物までもを取り込むように拡張していないからである。日英語では、〈使役構文〉ならびに〈使役行為者〉のカテゴリーの拡張が起る方向や程度が異なっているのである。<sup>3)</sup>

では、英語において、〈使役行為者〉のカテゴリーが無生物へと拡張されるための認知的基盤は一体何であろうか。次の例をみてみよう（例文はすべて西村（1998）からの引用）。

- (12) a. Rough weather has discouraged tourists from taking the boat to Alcatraz.  
b. Shifting winds kept hundreds of evacuees still waiting to find out if their homes survived.
- (13) a. Cancer kills thousands of people every year. (OALD)  
b. This medicine will make you feel better. (= (1a))
- (14) a. This book gives you some idea of life in Ancient Greece. (= (1b))  
b. His theory explains the behavior of chickens raised in factories.

これらの例において無生物主語となっているのは、自然現象（= (12)）、病気や薬（= (13)）、更には人間に理解などをもたらす力のあるもの（= (14)）である。これらの無生物主語はすべて、「自らの力で（人間など）他の存在に働きかけて影響を及ぼす主体と見なすことが容易」であり、その点において〈使役行為者〉のプロトタイプと共通性をもっていることになる。ここには無生物を人間に見立てるという「擬人化」の過程が関わっている。<sup>4)</sup> 日本語では、(12)–(14)のような例において、無生物を主語とした使役構文を用いることはない。これは、西村（1998）の説明に従えば、日本語においては英語ほどこのような「擬人化」の慣習化が進んでいないからということになる。

確かに、西村も指摘するように、台風や異常気象現象などに対してしばしば人間の名前がつけられているのをみても、英語において自然現象が一種の行為者として捉えられているということの証拠と言えよう。更に、池上（1981: 205）で引用されている、次のような夏目漱石の「擬人法」に対する態度も、非常に印象的である。

元来余は所謂抽象的事物の擬人法に接する度毎に、其多くの場合が態とらしく気取りたるに頗る不快を感じ、延いては此話法を総じて厭ふべきものと断定するに至れり。……これ恰も多年の修養を都会に積みし田舎漢を再び昔の山出しに引き直して、暫らく十年前の気分

3) 無生物主語以外に、例えば道具主語 (i)、意図性を欠く人間主語 (ii) は、典型的な〈使役行為者〉ではないが、これらは英語に特有な拡張事例となっている。日本語に特有な拡張事例として、西村（1998）では、英語と同様の意図性を欠く人間主語 (iii)、更に (iv) のような従属節の使役表現が挙げられている。

(i) The key opened the door.

(ii) Mary cut her finger while peeling an apple.

(iii) 花子は林檎の皮を剥いていて指を切ってしまった。

(iv) 投手は眼鏡を光らせながら、投球モーションに入った。

4) 更にもう少し拡張の程度が進むと、次のように原因やきっかけまでもを許容できるようになる（西村（1998: 144–45）を参照）。

(i) Hard work killed his father. (= (1c))

(ii) What brought you out here? (= (1d))

に帰れと強ふるが如し、不自然もまた甚しと云ふべし。……猿が冠を被りて大名に成済ます事の六づかしげなるに似たり。（夏目漱石『文学論』）

漱石が挙げているのは、Pity cries（憐れみが泣き叫ぶ）という例であるが、「憐れみが泣き叫ぶ」というような表現は、池上也述べているように、翻訳文化を通じて漱石の時代よりも遙かに外国語的な表現には慣れているはずの現在の我々にとってすら、かなり技巧性を感じてしまう表現である。確かに、「英語では、日常的な言葉遣いから擬人法という修辭的な表現法に至るまでの距離はそう遠くない」、「日常的なレベルの言葉で、擬人法的な言い方の成立する土壌が十分に成立している」という池上（1981: 207）の指摘は正しいと言わざるをえない。

ところで、これまでみてきた英語の無生物主語構文は、この Pity cries のような修辭的な表現と、程度の差こそあれ基本的に同じ擬人化という過程を経て成立している構文と考えるべきなのだろうか。次節でこの問題を検討してみたい。

#### 4. 行為焦点と結果焦点

英語において日常言語のレベルにおける擬人化の慣習化が日本語と比べて進んでいるというのが事実であるとしても、無生物主語構文に関する日英語間の自然さの違いが、それですべて説明できるのだろうか。英語の無生物主語構文は、すべて擬人化の過程と関わっているのだろうか。それは非常に疑わしいように思われる。そのことを以下、幾つかの例を通してみていきたい。

既に述べたように、無生物主語構文の多くは、分析的もしくは語彙的使役動詞を述語動詞としている。しかし、幾つかある分析的使役動詞の中でも、無生物を主語にできるのは、make に限られるようである。では、なぜ他の分析的使役動詞では無生物主語が不自然なのだろうか。この問題は、無生物主語構文一般の成立原因を考える上で、一つの大きな示唆を与えてくれるもののように思われる。

Ikegami (1990) は、SEU (Survey of English Usage) コーパスを用いて、have, get, make, let という現代英語の4つの代表的な分析的使役動詞について調査している。<sup>5)</sup> それによると、have, get, let の3つの分析的使役動詞に関しては、無生物の主語をとっている例は一例もなく、一方 make の場合は、むしろ無生物主語の方が普通と言える(89例中60例が無生物主語となっている)。有生(人間)の主語が現れている場合でも、make の主語は一般に意図性を欠いており、Ikegami (1990) に従えば、make の主語にみられるこのような動作主性の欠如は、使役行為の過程そのものよりも、むしろその結果を焦点化することにつながることになる。一方、make と最も対照的なのが get であり、get の場合、典型的には、使役行為者が意図した状況を引き起すのに相手側からの抵抗を受けるなど、使役行為に何らかの困難さが伴うような場合に対して用いられ、結果というより使役行為の過程そのものに焦点があると言える。使役行為に何らかの困難さが伴う場合に get が用いられる傾向にあるということは、例えば Ikegami (1990) に引用されている get の例のほとんどが、be possible, can, could などの表現と一緒に現れていることから明らかであろう。

5) SEU は、1959年に Randolph Quirk によって現代イギリス英語の書き言葉と話し言葉を調査する目的で始められた。様々なジャンルにわたる各5,000語のテキスト200からなる規模約100万語のコーパスである。

- (15) A: ..... because things aren't all that good at the moment.  
 B: yeah, but if it would be possible to get them to go up, I'll try, but I don't think they can. (S8.1.9)
- (16) I wonder if I could get you to think aloud a little about the ideal of a social contract or compact which has figured so largely in Labour Party publicity. .... (S6.3.37)

それに対して、make が法助動詞と共に使用されている例は、比較的少ないということである (Ikegami(1990: 194))。分析的使役動詞 make と get の間にみられるこの結果指向 vs. 行為指向という対立は、おそらく両者のもっと基本的な用法に由来しているものと思われるが、ここではさしあたり次のことを確認しておきたい。つまり、無生物主語が現れるかどうかということと、その構文が結果指向であるかどうかということとの間には大きな関係がある、ということである。構文が結果指向性をもつ場合に限り、無生物主語が可能となる。このことは、勿論、なぜ英語の無生物主語構文の多くにおいて、使役動詞が述語動詞として選ばれているのかという問題に対して、解答を与えてくれる。使役動詞のみが、単なる行為だけでなく、その結果状態をもその意味構造の中に含んでいるからである。

もう一つ、同様の例をみておこう。英語の与格動詞に関して、例えば (17a), (18a) のように相手 (Mary) が間接目的語で表されていれば行為の意図の達成が含意されるが、(17b), (18b) のように to を伴った前置詞句で表されていればそのような含意はない、といった現象がよく知られている (詳しくは Green (1974: 156-58) を参照)。

- (17) a. John taught Mary English.  
 b. John taught English to Mary.
- (18) a. John showed Mary a photo.  
 b. John showed a photo to Mary.

(17) について述べれば、(17a) ではメアリーが英語を習得していることが含意されているが、(17b) では必ずしも習得していなくてもよい、ということになる。ところで、teach も show も無生物の主語をとることができるが、その場合は、必ず間接目的語の構文の形式をとらなければならない (例文は Green (1974) からの引用)。

- (19) a. Being criticized taught John criticism.  
 b. \* Being criticized taught criticism to John.
- (20) a. A little experience will show Mary the absurdity of that claim.  
 b. \* A little experience will show the absurdity of that claim to Mary.

このような事実に対して、幾つか説明の方法が可能なのにも思われるが、結局、池上(1980-81) でなされているような形の説明に落ち着くことになるのではないだろうか。要するに、先に分析的使役動詞 make のところでみた説明と基本的に同じであって、行為そのものよりもその結果に焦点があるような構文、つまり結果の成就が含意される方の構文において無生物主語が可能になる、というものである。池上が指摘する通り、前置詞 to を用いた構文では行為自体の方に焦点があり、「動作主」の概念が予想されて、無生物主語とは折り合わないであろう。

ちなみに、Green (1974) によれば、同じ与格動詞であっても give の場合にはどちらの形式であっても意味は同じであり、意図の達成が含意されていることになる。つまり、(21a, b) のどちらの文でも、メアリーは林檎を受け取っている。

- (21) a. John gave Mary an apple.  
b. John gave an apple to Mary.

しかし、無生物主語をとれるのは、やはり間接目的語の構文の形式に限られる ((23a) の主語は人間ではあるが、含意される結果に対して意図性を欠いているという点で、むしろ無生物主語に近い<sup>6)</sup>)。

- (22) a. Eating liver gives you lots of iron.  
b. \*Eating liver gives lots of iron to you.  
(23) a. Mary gave John pneumonia.  
b. \*Mary gave pneumonia to John. (Green (1974))

このような事実を考慮にいれるならば、実際に結果の成就が含意されるということと、結果状態の方に焦点があるということとは別の問題であり、無生物主語構文の条件としては、やはり後者の条件を満たすような構文を選ばなければならないということになるだろう。

ここで、これまで述べてきたことをまとめてみると、分析的使役動詞 get (そして have や let) が無生物主語をとらないのは、この動詞には、make の場合と比べて、行為の様態などに関する意味情報が多く含まれ、したがって行為焦点になっているからだろうと思われる。同じく与格動詞についても、to 前置詞を伴った方の構文は行為焦点となっているがゆえに、無生物主語をとらないと考えられる。いずれにせよ、第3節でみたような西村 (1998) の文法カテゴリーの拡張によるアプローチが仮に正しいとしても、擬人化に基づいて<使役行為者>のカテゴリーを無生物主語にまで拡張させるという考え方だけでは、このような例に対して原理だった説明は難しいであろう。

英語と日本語では、既に述べたように、確かに、日常言語における擬人化の慣習化の程度に差がみられるが、以上のようにみえてくると、無生物主語構文の自然さの違いの原因は、むしろ英語の結果重視的傾向及び日本語の行為重視的傾向にこそ求められるべきなのではないだろうか。英語の結果重視的傾向と日本語の行為重視的傾向を示すものとしてはまず、池上 (1980-81) などで議論されている次のような現象が挙げられる。つまり、日英語で一見対応する行為動詞が結果の成就まで含意するか否かで対立がある場合、つねに英語の動詞の方が結果の成就を含意する (そして日本語ではそのような含意はない)、というものである (例文も池上 (1980-81) から)。

- (24) a. \*John burned it, but it didnt burn.  
b. 燃やしたけれど、燃えなかったよ。  
(25) a. \*I cheated Mary, but she realized what I was trying to do.  
b. 花子をだましたけれども、ひっかからなかった。

6) なお、Pinker (1989: 212) における議論も参照のこと。



更に、次の各例も同様に、英語の動詞の結果重視的傾向を示している。

- (26) a. John ran to the station.  
 b. ??駅に走った。  
 c. 駅に走って行った。
- (27) a. He pounded the metal flat.  
 b. \*金属を平らにたたいた。  
 c. 金属を平らにたたき延ばした。
- (28) a. Mary baked me a cake.  
 b. ??私にケーキを焼いた。  
 c. 私にケーキを焼いてくれた。

(26), (27), (28)は、それぞれ移動動詞構文、結果構文、受益構文と呼ばれる構文であり、すべて何らかの意味での結果状態に言及する構文である（これらの構文に関する日英語間の違いについての詳細な議論としては、それぞれ影山 (1997), 影山 (1996), Shibatani (1996) などを参照）。つまり、(26) の移動動詞構文は、動詞の表す「走る」という行為だけでなく、その結果として行為者に位置的变化が生じたことを記述し、同様に (27) の結果構文は、「金属をたく」という行為だけでなく、その結果として対象にある状態変化が生じたことを、また (28) の受益構文は、「ケーキを焼く」という行為だけでなく、その結果として相手がある種の恩恵を受けたことを記述している。(26)についてしてみると、英語の動詞 run は単独で、行為者の位置的变化を表す着点と結びつくことができるが、それに対応する日本語の「走る」はそれが不可能であり、着点と結びつくためには、「行く」を別に加えなければならない。これは、日本語の「走る」は行為性が強く、そのままの形では着点の表現とはなじまないが、「行く」を加えることで、結果指向性をもつようになるからではないだろうか。英語の run の場合は、本来的に着点の表現と結びつくための結果指向性を備えていると思われる。(27) や (28) の構文においても、英語の場合とは異なって、日本語では、下線部を引いたような動詞や補助動詞が別に用意されていないと不自然な文となっている。つまり、英語では動詞一つで表現することを、日本語で表現しようとすれば、結果を焦点化させるための工夫が別に必要であるということなのであり、これらの現象もまた、英語の動詞の結果指向性を示しているのである。

このような結果重視的傾向 vs. 行為重視的傾向という観点から、日英語の無生物主語構文の自然さの違いも説明できるのではないと思われる。日本語の無生物主語構文の場合も、(29) にみるように、「くれる」という補助動詞を動詞に加えることにより、不自然さが解消される場合があるが、この場合も、先にみた受益構文の場合同様、「くれる」が結果状態を焦点化する役割を果たしているのではないかと考えられるのである。<sup>7)</sup>

- (29) a. ??その経験は私に人生の厳しさを教えた。  
 b. その経験は私に人生の厳しさを教えてくれた。

以上、焦点化の違いが、日英語における無生物主語構文の自然さの程度の違いを生み出しているという結論に達したわけであるが、最後に、一つの理論的立場から簡単にまとめておきた

7) なお、西村 (1998: 196) の注 7 も参照のこと。

い。まず、少なくとも西村（1998）で提案されているような文法カテゴリーの拡張によるアプローチでは、これまでみてきたような、無生物主語構文の自然さの度合と焦点化の問題とを結びつけるモデルを期待することは難しいと思われる。一方、例えば影山（1996）では、語彙概念構造に認知的焦点または際立ちという考え方を導入することにより、先にもみた次のような現象に説明を与えようとしている。

- (30) a. \* John burned it, but it didn't burn.  
b. 燃やしたけれど、燃えなかったよ。 (= (24))

従来、(30)のような文の概念構造は、英語でも日本語でも、CAUSE という関数を用いて、おおよそ X (=行為) CAUSE Y (=結果状態) のように表示されている。しかし、CAUSE は結果の成立を含意するものであり、したがって日本語の方の例は説明できないことになるので、影山は代わりに CONTROL という関数を用い、加えて、認知的焦点または際立ちという考え方を提案している（影山（1996：86））。そうすると、従来の X CAUSE Y という表示は、X と Y のどちらに焦点が置かれているかで、(31) のどちらかの表示に分かれることになる（太字が焦点のある部分）。

- (31) a. 行為焦点： X CONTROL Y  
b. 結果焦点： X CONTROL Y

CONTROL は「Y の成立を直接的に左右する」という程度の意味であり、必ずしも Y の成立が含意されない。Y に認知的焦点がある場合にのみ、Y の成立が含意されることになる。英語は Y に焦点を置く傾向の強い言語であり、逆に日本語は X に焦点を置く傾向が強いので、必ずしも結果状態が含意されず、日英語間に (30) にみるような違いが生じることになる、というわけである。

このような考え方は、勿論、日英語間の無生物主語構文の自然さの違いを説明する際にも有効であろう。例えば、(32)の a の概念構造は、以上のような影山のモデルにしたがえば、おおよそ b のように表示できる。

- (32) a. Hard work killed his father. (=1c)  
b. [Hard work ACT ON his father] CONTROL [BECOME [his father BE AT DEAD]]

(32b) の表示のように、結果状態が焦点化されているということが、無生物主語構文の成立のための必要条件ということになる。日本語の場合、行為の方に焦点があるので、「無生物の行為」という側面が前面に押し出され、それが無生物主語構文の不自然さの原因となっていると考えられる。一方、英語では、「無生物の行為」という側面は背景化されて逆に「状態変化」の方が前景化されることにより、前者は「行為」というよりむしろ後者を導くための「原因」、「きっかけ」という（日本語では副詞的表現をとるような）位置づけを与えられることになるため、無生物主語構文が不自然に感じられないのではないと思われる。

## 5. おわりに

以上、英語では無生物主語構文が自然な表現形式であるのに、日本語でそれが不自然に響くのはなぜか、また英語の無生物主語構文の多くで分析的あるいは語彙的使役動詞が用いられているのはなぜか、という第1節の終わりで提起した問題に対して、自然な説明が与えられたのではないかと思う。Silverstein や角田の主張する名詞句の階層は、普遍性のある原理であり、また認知の点からみても自然な原理だと考えられるが、英語の無生物主語構文においては、その強い結果焦点指向により、概念構造において無生物の行為性が背景化しているのではないかと考えてきたわけである。もとより、一つの構文の自然らしさには様々な要因が絡んでいるとみるのが自然であろう。英語の無生物主語構文を可能にしている一つの要因として、日常言語における擬人化の慣習化も確かに否定できないものかもしれない。ただ、これまでみてきたような行為重視指向 vs. 結果重視指向という対立が日英語の相違に関わる最も根本的なものの一つであるとみて間違いなく、特に、無生物主語構文に典型的に現れているような英語の「する」的表現型の大部分は、この言語の非常に強い結果重視指向性によって支えられているのではないかと考えられる。仮に極端な「する」的表現をとっている場合でも、その言語において、概念構造のレベルで行為的側面が背景化されるメカニズムが備わっていれば、その表現は、その言語の母国語話者にとって修辭的あるいは技巧的な感じは全くないはずである。英語の母国語話者が、無生物主語構文に対して、擬人的な感じを全くもっていないというのも、それを物語っている。英語と日本語のように異なる表現形式をとっていても、焦点化の情報を伴った概念構造のレベルでは、かなり似通った認知内容をもつことになるのではないかと考えられるのである。

## 参 考 文 献

- Green, G. M. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.  
Hinds, J. 1986. *Situation vs. Person Focus*. くろしお出版.  
池上嘉彦. 1980-81. 「Activity-Accomplishment-Achievement: 動詞意味構造の類型」『英語青年』80年12月号-81年3月号.  
池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店  
Ikegami, Y. 1990. HAVE/GET/MAKE/LET+Object+ (to-) Infinitive in the SEU Corpus. 『文法と意味の間』くろしお出版.  
影山太郎. 1996. 『動詞意味論』くろしお出版.  
影山太郎. 1997. 「単語を越えた語形成」『語形成と概念構造 (日英語比較選書 8)』研究社.  
国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』三省堂.  
国広哲弥. 1974. 「人間中心と状況中心」『英語青年』2月号.  
久野 暉. 1978. 『談話の文法』大修館書店.  
西村義樹. 1998. 「行為者と使役構文」『構文と事象構造 (日英語比較選書 5)』研究社.  
Pinker, S. 1989. *Learnability and Cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.  
Shibatani, M. 1996. Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. In M. Shibatani and S. A. Thompson, eds., *Grammatical Constructions*, 157-94. Oxford: Oxford University Press.  
Silverstein, M. 1976. Hierarchy of Features and Ergativity. In R. M. W. Dixon, ed., *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-71. Canberra: AIAS, and New Jersey: Humanities Press.  
角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』くろしお出版.  
<辞典>  
OALD=Oxford Advanced Learners Dictionary of Current English, 1995<sup>5</sup>.